

1 はじめに

本論文では、抽象語の持つあいまい性について考察する。論文指導において小論文を書かせた場合に、抽象語を使えない、使っても間違った使い方をしているために意味が通らない文を書いてしまうといった学生が多い。そこで本論文の目的は、この問題を解決するためにはどうすればよいかを考えることとする。

2 背景

小論文を書くときに学生は、普段文章を書くときと違い、かまえてしまうようだ。つまり日常生活の中ではあまり書くことのない内容のものを書くので、いつもと違う言葉を使わなければいけないと思う。どういう言葉かといういわゆる抽象語である。これがなかなか正確に使えない。前述したようにせつかく使っても適切な語を選択できず、意味が通らなくなる。

例えば、「抽象」、「普遍」、「概念」といった抽象語はほとんど使う学生はいない。「一般的」、「主観」といった語はたまに使う学生がいるが、意味不明の文章になっていることが多い。この理由としては、学生の頭の中ではその抽象語の意味があいまいで、その状態のまま使っているからだ予想される。抽象語によっては、まったくわからないのではなく（使うということは、ある程度わかっているはず）なんとなく、という程度はわかっている。だが、その言葉の意味を明確に理解していない。中には見たことはあるが意味がまったくわからないもの、さらにはまったく知らないものも多いようだ。論文の場合、そういった抽象語を多く使わなければならないという思いから、無理やり使ってその結果、意味が通らない文になってしまう。では正しく使えないと考えられる抽象語とはどのようなものがあり、その使えない理由は何か。それがわかれば、使えるようにするための方法も見つかるのではないだろうか。

例えば工学の分野にエキスパートシステムというものがある。これはプロの知識・技をコンピュータに載せ、それを共有化し、素人でもプロと同じように機械を制御したり医療診断をしたりできるように支援するものである。その知識があいまいな場合が、ファジイエキスパートシステムと呼ばれるものである。機械のコントロールの場合、プロは必ずしも物理法則を使って計算し、コントロールするというわけではない。正確な温度を測らなくても、例えば手を触れてそのおよその、かつ微妙な感じでコントロールする。「ちょっと温度が高くなったらしばらく電源をオフする」といったようにだ。実際の知識は、このような明確な言葉で表される形のものではないと思われるが、知識の共有化のために明確に言葉に直しルール化され、知識データとして蓄えられる。それを誰でも利用可能にしたものがエキスパートシステムである。また、手のひらの上に一本の切花を立てるということを考えてみよう。これはたとえ力学の法則を知らなくても誰でもできることであろう。左に倒れかけたら少し左に手のひらを移動させて安定させる、といったことを無意識のうちに行うことにより可能にしている。これらをルール化しエキスパートシステムを作ると、機械（ロボット）も手のひらの上に花を立てるということができる。これを物理法則を使ってルール化しようとしたら膨大なルールとデータが必要であり、おそらくそれでもできないであろう。あいまいさを残したまま日常使っている言葉でルールを作っていくことにより可能になっているのである。

正確な温度を知らなくても、力学の法則を知らなくても目的（コントロール）を遂行できる人がいて、その人の知識をルール化し、他の人も利用して対象物をコントロールできる。これと同様に、抽象語を使える人がその使用パターンをエキスパートシステムのような形にしたら、抽象語を使えない人が言いたいことをそのシステムを利用して抽象語の文章に直せるのだろうか。翻訳機のように、抽象語の意味を正確に知らなくても抽象語を使った論文を書ける（作れる）ということになるのだろうか。

2 あいまい性の理論

本論文では抽象語というあいまいな言葉について考えていくが、まず、あいまい性に関する理論について整理しておきたい。このテーマはおよそ次のように三つに分けられるようだ。⁽¹⁾

- (1) 対象が境界上にあるかどうか
- (2) 明確な境界を持つかどうか
- (3) パラドックスの問題

(1) と (2) は境界問題として一つにまとめても良いだろう。したがってあいまい性に関する理論は大きく、境界問題とパラドックス問題の二つに分けられる。

あいまい性理論の代表ともいえるファジィ理論は、境界問題に属するものである。例えば、ファジィ集合の考案者ザデーが対象としたのは、「美しい女性」、「背の高い人」、「1より非常に大きな実数」といったものであった。これらは正確にその集合（の境界）を決められない。あいまいなその集合の境界をメンバーシップ関数（MF）を用いて定義し、各要素（対象となるもの）がその集合に属する「度合い」を考える。数学的に厳密な集合ではないが、しかしパターン認識、情報伝達、抽象の領域で重要な役割を果たしているこういった境界があいまいな集合を、ファジィ理論では対象としている。⁽²⁾

ファジィ理論のMFと同じような関数を考案したブラックは、あいまいさの例として椅子を挙げている。⁽³⁾ 見るからに椅子とみなせる家具、一方で切り株を考え、その間にさまざまな椅子らしきものを椅子らしき順に並べる。これも椅子と椅子でないものとの境界に関する理論である。

ここであいまいな語を少し整理しておこう。まず「高い」という語だが、これは測定値に置き換えられる。例えば身長ならばcmに置き換えられる。実際、ファジィ理論におけるMFではこれを横軸に用いる。次に「大きい」という語がある。これはもちろん対象にもよるが先に挙げた「高い」よりも少し複雑になる。なぜならばそれを測定値に置き換えようとしたとき、高さと言語という二つの値を必要とするからである。「高い」が一元的な語だとすると、「大きい」は二元的な語だということができよう。その分、複雑になるわけだ。体積（ cm^3 ）で考えれば一元的であると考えられそうだが、例えば直方体の体積が底面積と高さから求められることを考えれば、やはり二元的だ。ファジィ理論の場合も、「大きい」対象であるかどうかはまず「背が高い」のMFから度合いを決める。たとえば0.8だとする。次に「重い」のMFから度合いを求める。たとえば0.9だとする。このとき対象が「大きい」度合いは

$$\text{背が高い} \wedge \text{重い} = 0.8 \wedge 0.9 = 0.8$$

として求めることができ、二元的であるといえる。

こういったあいまいな語に対して、「正義」という語はどうか。これは測定の対象とはならない。しかし「正義」であると考えられる行為を示すことができる。正義の具体例である。言葉で示すだけでなく、実際に行われた行為に対してそれが正義であるかどうかを言うことが可能である。

しかし「概念」という語は、概念の例を示すことができるが、それは言葉で示すしかない。さらに「一般」「抽象」といった語にいたっては、そのものの例を言葉で示すことすら難しい。

つまり言葉のわかりやすさの程度はいろいろあるということである。上に挙げた順にわかりやすいと考えられるだろう。測定できるほうがわかりやすく、測定も多元的になるとわかりにくくなる。測定できなくても示すことができればわかるが、イメージとして示せるかどうかによりわかりやすさは左右される。

ブラックが考えた「椅子」はどの程度のわかりやすさか。一般に椅子は「腰を掛けて座るための家具。腰掛け」(大辞泉)と定義される。椅子を椅子かどうか数値で表せるだろうか。まず椅子の一番重要な機能として座れるかどうかの問題になる。これは座れそうな面の面積 (cm^2) として測定可能だ。実際に座れるかは、高さ、安定性(縦横比、傾きなど)の測定になるだろう。座る面の柔らかさも必要かもしれない。こういった数字で表されるものを用いて、各MFからそれぞれの度合いを求め、合成して椅子の度合い、すなわち椅子らしさを計算する。大きい人かどうかの場合、次元が少ない(身長・体重)ので度合いを計算することは簡単である。しかし椅子は、椅子らしさを決定するためにさまざまな属性を考慮しなければならない。つまり多元的になるので、その場合は計算するよりイメージで求めた方が早い。実際に座ったときをイメージし、座り心地を想像し、その快適度から椅子らしさの度合いを考える。椅子という対象物は身近にたくさんあるので、非常にイメージしやすい。そのため、多元的であってもわかりやすい語の部類に入るであろう。

ところで椅子らしさ(椅子の度合い)を数値として求める理由は一体なんだろうか。論理的には、エキスパートシステムのように推理に使うことが考えられる。しかしこの度合いの利用頻度は低いだろう。日常的には、椅子に関する問題は座れるかどうかであり、このとき「らしさ」の数値まで求める必要ない。「(背が)高い」も同様だろう。そもそもAさんの身長(cm)とMFから求められる「高い」の度合いと、Aさんが「とても高い」は同じに論じられるのか。身長のMFはあらゆる対象を考えた「背が高い」の定義で、度合いはそこから客観的に求められるもの、つまり意味論に関わってくるものであり、「とても背が高い」はある対象がいて、その人に対して用いられる語用論の問題である。

パラドックスにおいて、低い人Aさんの身長+1/10インチが低いか、さらに+1/10インチが低いか……という問題は、この二つが混在しているとみなせる。普通は高いか低いかを考える場合に、1/10インチはその判断に影響を与えない。したがって基準(の人)+1/10インチが低いかどうかという判断は、日常ではナンセンスだろう。ある人が低いかどうか判断するときに、基準となる人を考えることはない。もちろん日本人として、とかアメリカ人としてという基準はあるが、正確な基準値があるわけではない。⁽⁴⁾時間軸で考えて過去に基準がある場合は、過去と切り離して低い・高いを判断するだろう。切り離さない場合は高い・低いではなく、背が伸びたかどうかという別の判断になる。

さて、あいまい性についても少しみてみよう。椅子のあいまい性というのは、ある対象が椅子か椅子でないかということを決める際にでてくる。「高い」のあいまい性はある対象が高いか高くないかを決定する際にでてくる。他の抽象語はどうだろうか。「一般」のあいまい性は、「椅子」や「高い」のあいまい性とは異なり、「一般」か「一般」でないかというあいまいさではない。つまり境界に関わるあいまいさではない。したがってMFを考えられない。つまりこの場合のあいまいさは度合いで考えることはできないということである。「椅子」のあいまいさは椅子かどうか

かという境界に関するものであったが、「一般」のあいまいさは言葉の意味内容に関係するものであり、このあいまいさはわからなさ（理解の程度）につながるものである。どのくらい椅子らしいかではなく、どのくらい「一般」がわかるかということである。もしもわかるならばその語を使えるだろう。「わかる」とは

（Aは）Bであることを知っている

と置き換えることができる。⁽⁵⁾ 例えばある対象が椅子であることがわかるとは、それが座ることのできるものであることを知っている、となる。具体的であり、辞書の定義そのものとは限らない。「一般」という語はBにあたるものを把握できないのでわからない、したがって使えない、ということになる。

椅子とはなにかを考えたとき、一般的・共通的な答えを求めようとするならばそれは辞書に載っている定義となる。対象を見て椅子であるか判断が可能となると、椅子がどのようなものであるかがわかっていると見える。これが辞書に載っている定義そのものである必要はない。明確に言葉で説明できる必要も無い。日常生活においては意味は意味を離れた実体ではない。⁽⁶⁾ つまり「椅子」を知っているとは、椅子の定義を知っているということではなく、対象が椅子としての機能を持っているかを判断できるということの意味している。

ファジィ理論においては「高い人」らしさ、「椅子」らしさを考えるが、必ずその考える対象が「在る」。それが該当する集合に含まれるか、どの程度含まれるかが問題となる。この程度を決めるのがMFである。つまり境界があいまいであり、かつそのあいまいさをMFで定義できるものがファジィの扱うことのできる対象となる。「一般」といった抽象語は定義の際に出てくる境界のあいまいさではないので、ファジィ理論では扱えないあいまいさである。

3 二種類のあいまい性

このように考えてみると、あいまい性には二種類あることがわかる。すなわち定義におけるあいまい性と、理解・使用におけるあいまい性である。前者は、高い、大きい、椅子といったものの定義に関するもので、ザデーやブラックがその境界のあいまい性をMFで表そうとした。例えば「ジョンはちょっと若い」という文をファジィ理論では「ジョンが若い度合いは0.7」と表す。しかしこの二つがまったく同じことを意味していると考えるのはちょっと難しい。⁽⁷⁾ 前者が個人的意見つまりそのように理解したということであるのに対し、後者が定義の形態を取っているからである。

さて、危険の意味（定義）は正確に知らなくても、理解可能である。そして危険だと判断することは次の行動へとつながる。このとき危険の集合はクリस्प集合だ。ライオンがそこに含まれるかどうかはあいまいでは困る。明確に決めなければならない。危険の度合いが0.7では行動できない。危険かどうかを判断する対象がまず存在し、それが危険かを決めるのは自分である。その判断を誤ると命取りになる。行動に移すという個人的な行為は二値で考えないと動けない。「危険」の理解はこのとき決してあいまいではない。二値のクリस्प集合として考えられている。もし危険かどうかの判断ができない場合は、危険の意味をあいまいにしかわかっていないということであり、次の行動に移れず命を落とす羽目になるかもしれない。まとめると次のようになる。

ライオンを見る。ライオンが危険かどうか決める。危険と判断する（二値）。逃げる。

別の例を考えてみよう。コップに入った飲み物がある。これが「冷たい」という集合に含まれ

るかを決めるのは決定的である。つまり境界は明確なものとして捉えられる。しかしその境界が「14℃以下である」必要はない。コップが冷たい集合に入っていない場合、冷蔵庫に入れる、という行動につながる。ファジィ集合の場合、「冷たい」という境界のあいまいな集合がMFを用いて定義される。行動を伴う場合の判断においては、「冷たい」の度合いが0.7というかわりに、普通は「ちょっと冷たい」か否かというというクリस्प集合を使い、境界領域は問題とならない。

「正義とはなにか」を考えると、これは定義のあいまい性に関するものであり、この時点では行動とは関係ない。しかし定義を正確に分かっていなくても、理解できる。したがって次のような事態を考えることができる。

テロが起きる。そのテロが危険かどうか決める。危険と判断する（二値）。攻撃を検討する。
その攻撃が正義かどうか決める。正義と判断する（二値）。攻撃する。

この場合は正義一般の話ではない。

以上のように、座るといふ目的のために行われる椅子か椅子ではないかの判断においては中間領域は存在しない。高い・低い、冷たいかどうかの場合も同様である。われわれは通常（生活しているとき、つまり行動しているとき）、概念をシャープな境界をもつものとして考えていないというが、⁽⁸⁾ 定義を考えたときがそうなのであって、行動のために思考・判断しているときは上述のようにシャープな境界を持つものとして扱っているのである。正義についても同じである。判断を下せない、行動に移せないというのはその語が理解・使用のあいまい性を持つからである。

本来、行動の基本は集団（属している社会・国など）でなく個人であると考えられる。個人が、つまり自分が一番大切な存在となる。まず自分の命を守る。それから意識を周囲の社会に、国に広げていく。ところが「概念」という言葉が、命にどれだけかかわるか、どういった行動につながる言葉かを考えてみると、今まで挙げてきたような言葉とは違うタイプのものであることがわかる。つまり行動にはつながらないので、理解・使用に関するあいまい性はなく、定義におけるあいまい性が存在するということになる。

定義のあいまい性についてもう一点、「エベレスト」を例に考えておきたい。「エベレスト」も定義のあいまい性⁽⁹⁾を有する。どこからどこがエベレストとされるのか。ここで誰が何のためにそれを決めるか。国土地理院がエベレストを定義するのか、「エベレストに登った！」と自慢する人、それを嘘だという人が決めようとしているのか。前者の場合、定義に関するあいまい性と捉えてよいであろう。だがこの定義のあいまい性は、エベレストの場合は境界（がどこまでか）にあるが、「概念」の場合には境界にあるのではない。ここはエベレストか、ここはどうか、と尋ねる。人によって答えは違うかもしれないがその統計を取って「エベレストらしさ」の度合いを決めることができよう。あいまいな境界を決めることができるのだ。しかし「概念」はその様な形で境界を決めることはできない。エベレストとは違うあいまいさなのである。

正義とは何か。これを知るために情報を集める。それで理解できないということは情報の不足なのか。不足とはどういうことか。なんらかの行動に移せばそれで十分な情報量なのではないか。必要な情報量・情報の質（「かなりと高い」という情報か、「高いの度合いが0.7」という情報か）は目的により異なるだろう。縮尺の小さい地図の方があいまいとするのはナンセンスである。⁽¹⁰⁾これが他人事になったときに常に情報が不足になる可能性がある。行動には限界があるので必要な情報も限ることができる。思考には限界がないから情報は多ければ多いほどよいと考えられている。定義のあいまいさ、これは学問の世界に属する。

前章の最後でファジィが扱えるあいまい性について述べたが、ここでもう一度確認しておきたい。ファジィ理論はMFにより本来視覚的でない言葉も、そのあいまい性を視覚で捉えられるようになってきている。例えば「暑い」がそうである。暑さは見えないが温度という測定された視覚的な数値に置き換える。「高い」はもともと測定値を用いなくても視覚的である。理解・使用におけるあいまい性を、定義のあいまい性をなくす（境界の不明瞭さを数値化）ことにより解決しようとする方法であるといえるが、逆にファジィ理論が用いられるのは視覚的なもの（数値）に置き換え可能なものに限られるということになる。「概念」や「抽象」といった抽象語は置き換え不可能なのでできない。定義のあいまい性がそのまま残ってしまう。

4 抽象語とは

「らしさ」ということについて考えてみたい。これはファジィ理論ではMFを用いて度合いに置き換えられた。例えば「中年」の定義を考えてみよう。⁽¹¹⁾ある人（対象Aがいる）が中年かどうか迷う。中年の意味はわかっている。しかしこの語は定義上ファジィな境界を持つから迷う。一方、一般らしさとか概念らしさという表現はあまり耳にしない。こういった抽象語は程度で表せないからだ。また抽象語は、意味を持つ（定義可能）がその言葉の対象となっている具体的なものとの対比では考えられていない。したがって前述したように行動につながるような情報をこの語からピックアップできない。目や耳といった感覚器官で確認できないのである。結局、明確に理解できないことになる。正義、一般、抽象、概念といった語がこれに属する。

しかしこういった抽象語も、さらに二つのタイプに分けられそうだ。仮にそれを抽象語と純抽象語としておこう。これは示せるか示せないかということで分類可能になる。例えば正義そのものを目や耳で見ることはできないが、正義的な行為としての具体例を示すことが可能である。正義の定義は次のようになっているが、これだけでは理解は難しいだろう。

正義の定義：人の道にかなって正しいこと。（大辞泉）

そこで前述したように、この行為は正義、これは違う、と例を示し正義の意味を理解しやすくすることができる。概念などもこの類であろう。ただ若干違うのは、正義はあいまいな境界を持つ集合が考えられそうだということだ。したがって正義らしさという言葉はあまり聞かないが、ある行為についてそれが正義として認められるか、という場合に大変そうである、とか絶対に違うといったように度合いで考えることはできる。しかし概念の場合、これは大変概念だという度合いで考えることはできない。

このような例を示せる抽象語に対し、純抽象語と呼ばれるものとして「一般」や「抽象」が考えられる。これらの語は例を示すことが難しい。「抽象化する」という動詞になったときにはじめて例を示すことができる（その過程を実際に行うことによって）。正義や国家といったものとはまた違うタイプのこのような純抽象語は、「一般化する」というように「…化する」とつけて動詞化できるものといえる。これがなかなか小論文を書く際に使えない。わからないから使えない、つまり理解のあいまいさの問題である。「…化する」がつくとまだ理解しやすそうである。一般化するその例を示せるからであろう。

要するに自分の行為としてイメージできないものは意味が捉えにくく理解・使用のあいまいさを持つ。普遍と特殊はともに純抽象語であり、まず使えない。両者は反対概念と考えられるが、普遍と特殊の境界があいまい（定義のあいまいさ）だから使えないのではなく、それぞれの理解

があいまいで使えないのである。定義のあいまい性のためだけに論文を書くときに使えないのではない。定義は辞書で調べられる。確かに調べても辞書によって異なっていたり、同語反復的で調べた内容がまた理解できなかつたりということも多い。例えば抽象概念の定義は

事物・事象の具体的全体から一般的性質をもつ部分を抽象したものを示す概念。(大辞泉)

とある。これを読んでも正確に理解できないだろう。しかしこれが使えない唯一の理由ではない。理解できたとしてもおそらく論文で使うことは難しいだろう。まだ理解のあいまい性が残っているからである。

オルストンは意味を知るとはその語をいつでも、いろいろな状況で正しく使えることであると考へた。⁽¹²⁾ つまりこのときの意味とは、辞書に書いてある内容そのものではない。使えるとは行動につながられるということである。貧乏と貧しいという二つの語は、辞書で調べればどちらも同じ意味が載っているだろう。しかし用法は同一ではない。「貧しい人々に愛の手を」というスローガンはあっても「貧乏な人々に愛の手を」というスローガンはまず聞かない。発汗と汗をかくこともイコールではない。「今、発汗しているの」とは言わないからだ。⁽¹³⁾ われわれは辞書上の意味は同じである二つの語の違いを知っているのに、使い分ができるし、しているのである。このことから定義(辞書の説明)のあいまいさと理解・使用のあいまいさが違うことがわかる。もちろん、理解・使用のあいまいさを減らすためには定義のあいまいさが少ないほうが好ましいが、使い方を知っていることと意味を正確に知っていることは違う。

間違った抽象語の使い方をするということは、まだ正確な使い方を知らないということである。意味が不明確だからというのも一因であるが、それを正確に知っていなければならないという必要はない。

5 漢語と和語(音と訓)

本章では、抽象語を漢字という視点で捉えてみたい。

われわれ人間が言葉を覚える過程を考えてみよう。一般に個々のモノの名前から覚えていく。指差して、これは犬である、これは魚であると覚えていく。人類が言葉を名づけていく過程も同じであったろう。こんなものがある。ワンと呼ぼう。こんなものもある。ニャンと呼ぼう。これはワンワンと呼ぼう…。すべてに名前をつけていこうとする。しかしすべてといっても無数にあるモノに名づけることは大変である。そこで似ているという点に注目し、ワン系を「犬」という名前をつけ代表させる。したがって犬という名詞は抽象というプロセスを経てできた一般的な概念であり、抽象名詞といえる。概念の発生である。集合ともいえる。われわれ人間は、これで考え、覚え、関連づけられるようになった。⁽¹⁴⁾

もちろん集合の名前からスタートすることもある。それを分析し、サブ概念(部分集合)に名前をつけていく。魚から、鮭・鯉といったように。しかし本来はまず外延があり、それに犬という名前をつけ、つぎにその内包を考へるといのが自然のスタイルだろう。まず現象の世界があり、その具体的なものから共通するものを抽象して一般化・法則化していく。ここに法則の世界と現象の世界との対応がある。

さて抽象語のわかりにくさであるが、それは日本が抽象語を輸入したことにあるという。通常は具体的な語から抽象的な語を作り出すという過程を踏むはずが、日本語の具体的な語から作り出す前に、大陸から抽象語が入ってきてそれを使うようになったのである。⁽¹⁵⁾ つまり抽象語は

犬や魚を名づけるのと同じような過程を経て日本語となったのではないのである。一部の英語がカタカナ語として日本語になったのと同じように、漢語（外国語）が漢字のままいきなり日本語となった外国語である。具体的な名詞と直接つながっていない。だから抽象語の漢字を見ても、犬や魚という語を見たときのようにイメージされるものがない。視覚的に意味を捉えようとするわれわれ日本人は漢字を見て理解しようとする。⁽¹⁶⁾ 始めて見る言葉（漢字）はもちろん意味がわからない。情報をその文字からピックアップしようとするのである。さらに得た情報を行動と結びつけようとする。このようにつねに具体的に考えて意味を把握しようとする。ところが抽象語は普通、一般的な内容であるために具体的なイメージがわからない。例えば「抽象」という純抽象語がそうである。常に具体と結びつけて考えるわれわれは、具体的イメージなしには理解が困難なのである。具体的イメージの無い語は理解が困難なのである。辞書に載っている定義を覚えることはできても、使い方がイメージできないから使えない。

そもそも漢字語を目にするとき、われわれは個々の漢字の意味から全体の漢字の意味を連想する。漢字語に助詞が含まれないのでいろいろに想像できる。個々の漢字が全体の語の理解の助けとなっている。個々の漢字は多義的だ。視覚的でないものもある。一方のひらがな語（和語）は一つ一つの仮名が全体の語の理解の助けにはなっていない。しかし身近な事に関するものなので理解しやすい。その意味するものは主に具体的なこと・視覚的なことである。つまり漢字はその字が視覚的、ひらがな語は内容が視覚的であるといえよう。ただし漢字は訓読みできるものはひらがな語の性格もあわせ持つ。

繰り返すが、視覚的ということは具体的にイメージできるということだ。抽象語は漢字によるものがほとんどである。世界の具体的なイメージは、抽象語の漢字一つ一つが持つ視覚的イメージにつながらない。漢字で書かれる抽象語が外国語だからだ。したがってわかりにくい。抽象語＝わかりにくいという図式が出来上がっている。

ひらがな語と書いてきたが、これはいわゆる和語、大和言葉のことをここでは指す。したがって漢字を使って表されることも多い。漢字を使っても具体的イメージと結びつく言葉である。ここで簡単に漢字語と和語の違いを比較しておこう。⁽¹⁷⁾

漢字語：音読み

客観的・一般的。非具体的。

例 抽象的、正義、幸福、言語、一般化

発汗→私のことではない。「汗をかくこと」一般について。

他人事。わかりにくい。使えない。

和語：訓読み

「私」のこと。具体的

例 汗をかく、言葉、貧しい、幸せ

身近。わかりやすい。使える。

例えば「理解する」と「わかる」という二つの語は、論文では前者、普通は後者を使うことが多い。論文は一般的・客観的な内容を書くことが望ましいので二つのうち、より客観的な表現がよいのである。

この章の最後にオノマトペについて少し考えてみたい。これは言語でなく言葉と理解することができる。つまりここに抽象性はない。したがって、正義の定義のように言語で説明できないのである。確かに辞書を調べれば説明が載っているが感覚的なものであるため、それを見ても他

の国のオノマトペをほとんど理解できないだろう。⁽¹⁸⁾つまり使えないということである。これは定義のあいまいさによるものではない。例えば「雨がしとしと降る」の「しとしと」にあたるものを辞書で調べると、例えば韓国語では早슬早슬(プスルプスル)となるがまったく同じではなく、微妙に示すものが違うようだ(ぼろぼろ、しょぼしょぼなども含む)。正義が国によって定義が違うのと同じずれだ。したがって辞書を引いても正しく使えるとは限らない。「しとしと」といったオノマトペをあまり使わない言語体系の国はさらに理解が困難であることが予想される。オノマトペは感覚的なものであるので、客観的に説明されても理解は難しい。この場合「どれが椅子であるか」と同様に、どの場合が「しとしと降る」かを示すことはできる。こういった帰納的な方法により意味を把握していくことになるだろう。ただしこれは極めて具体的、感覚的な語である。ゆえに論文では通常使われない。

6 論文における抽象語

日本語の抽象語は具体的なイメージを捉えにくく理解しにくい。特に本論文で純抽象語と呼んだものは具体例を挙げることにすら困難な語である。量子力学が視覚で捉えられない、要するにイメージできないから理解が難しいのと同じ理屈である。定義が明確になったら使えるかというそうではない。本来言葉はあいまいなもので、明確に定義することは不可能であろう。だがあいまいなままでも使える。定義のあいまい性と語の理解・使用に関するあいまい性の関係は、そう密接ではない。

論文は、論理の世界と日常の非論理的な世界との両方にまたがっている。それぞれの世界にはそれぞれの言葉がある。日常の非論理的な世界に生きている「私」が普段言いたいと思っていること(それがあることが大前提だが)は和語で考えられている。これを論文として書いていくときには(純)抽象語に変換した方がよい。論文では客観的に論を展開させ、読み手を説得させなければならない。できるだけ多くの人を説得させるためには具体的内容も必要だが、より一般的な内容がなければならない。したがって抽象語が適しているからである。ほぼ日常の世界だけで暮らしていた場合、抽象語、特に純抽象語はおそらく使えないが使わなければならない。抽象語で書こうとするために、思考が具体的事象を離れてしまい他人事となってしまう。そのため自分の問題として捉えられなくなり、内容も他人事でありきたりのことしか書けなくなってしまう。

日本語でありながら、かつて抽象語を輸入したときと同じように、突如新たな外国語を使うようなものでもある。英語の単語の意味が辞書を引いてもよくわからず、使用例から徐々にその使い方を学んでいくのと同じように、抽象語もその使用法に慣れるしかないだろう。普通に言葉を覚えるのと同様のプロセスになるかもしれない。「正義」の意味を帰納的に理解していく。すなわち様々な「正義」に関する具体例のなかに同一性を見出していくという方法である。もうひとつの方法として言葉を換えてみる、すなわち和語に置き換えてみるものが考えられる。貧乏と貧しいが違うようにまったく同じではないが、これで「イメージ」として捉えやすくなるのではないだろうか。エキスパートシステムの話を出したが、実際には翻訳機のようなものがあればよいだろう。

7 おわりに

小論文を書くときに、必要だが正確に使うことのできていない抽象語について考察した。抽象語を使えないのは、その定義があいまいだからではなく、理解・使用におけるあいまいさが原因で

あると考えられる。後者のあいまいさは抽象語が外来語であることに起因し、具体的なイメージを持たないことから生まれる。今後は、具体的にどのような抽象語が理解しにくいかを分析し、具体的なイメージとの関係を詳細に検討していきたい。

文献

- (1) R. Keefe & P. Smith, Theories of vagueness, *Vagueness: A Reader*, The MIT Press, 1997, pp.2-3
- (2) L. A. Zadeh, Fuzzy Sets, *Information and Control* 8, 1965, p.338,
- (3) M. Black, Vagueness, *Vagueness: A Reader*, The MIT Press, 1997, pp.72-73
- (4) M. Black , *Margins of Precision*, Cornell Univ. Press, 1970, p.9
- (5) R. Keefe & P. Smith, Theories of vagueness, *Vagueness: A Reader*, The MIT Press, 1997, p.21
- (6) オルストン『ことばの哲学』村上陽一郎訳, 培風館, 1968, p.35 (W. Alston, *Philosophy of Language*, Prentice-Hall, 1964, p.21
- (7) J. F. Brule, Fuzzy Systems- A Tutorial, <http://www.austinlinks.com/Fuzzy/tutorial.html>
- (8) Black, *Margins of Precision*, Cornell Univ. Press, 1970, p.13
- (9) R. Keefe & P. Smith, Theories of vagueness, *Vagueness: A Reader*, The MIT Press, 1997, p.16
- (10) B. Russell, Vagueness, *Vagueness: A Reader*, The MIT Press, 1997, p.66
- (11) (6)と同じ。pp.150-151, 原書 p.85
- (12) (6)と同じ。p.81, 原書 p.46
- (13) (6)と同じ。pp.79-82, 原書 p.44-46
- (14) 渡辺慧『認識とパタン』岩波書店, 1978, p.176
- (15) 森本哲郎『日本語 表と裏』新潮社, 1988, p.115
- (16) 石川九楊『二重言語国家・日本』日本放送出版協会, 1999, p.42
- (17) (16)と同じ。p.109
- (18) (15)と同じ。p.77

(日本大学准教授)